112 頭頸部悪性腫瘍の骨転移の検討－骨シンチグラフィによる分析

奥山武雄，梅原　功，桑原雄二，山崎悦夫，鈴木宗治（東京医科歯科大学医学部放射線科）

頭頸部悪性腫瘍389例の経過観察中に行われた骨シンチグラフィ（1980年1月～1986年12月）から骨転移の状況を分析した。口腔・咽頭などの主として粘膜癌257例では骨転移が52例（20.2％）にみられた。ただし，対象は進行症例であるので，口腔癌の全般的傾向を示すものではない。部位別にみると，舌癌10／20（50％），上顎癌6／43（14.0％），頬粘膜癌2／6（33.3％），下顎歯肉および口腔底癌3／69（4.3％），上咽頭癌10／21（47.6％）などであり，ことに上咽頭の未分化癌で高率であった。また少数例であるが，悪性黒色腫は4／7（57.1％）に骨転移が認められた。一方，悪性リンパ腫132例では25例（18.9％）に骨転移が認められた。非ホジキン病では21／120（17.5％），ホジキン病では4／12（33.3％）であった。初発部位別では頸部リンパ節症例12／55（21.8％），リンパ節外の鼻腔・歯肉など7／35（20.0％），ワルダイエル輪症例では2／30（6.7％）と差異が認められた。初回治療から骨転移までの期間が最も長かったのは5年半であった。病期別，組織型別にも検討する。

113 頭蓋骨の骨シンチ陽性像の転移・非転移

小野　慧，猪狩秀則，中村　豊，酒井聰子，山本洋一（神奈川県立がんセンター核医学科）

全身骨スキャンでみられる頭蓋骨の異常集積を追及し、転移・非転移の特徴を見い出すとともに頭蓋骨転移の頻度を検討した。

昭和61年 1月より12月までの 1年間に当施設で行なわれた1127例1285回の骨シンチのうち頭蓋骨陽性像を呈した51例につき調査した。転移・非転移の診断はX線写真、X線CTを中心に臨床経過、理学所見、剖検所見などを総合して行った。

頭蓋骨陽性像のうち転移と診断された33例のうち、4ケ所以上の骨転移巣を有するものは25例76％であり頭蓋骨単独の転移は 3例にすぎなかった。原発部位別では乳癌14例、肺癌 4例、前立腺癌 4例など骨転移率の高いものが多かった。

一方非転移陽性像は18例にみられ、うち10例は縫合線spotであった。又50～60才台の女性に多くみられる頭蓋冠全体にわたるび慢性集積は、骨転移よりも代謝性骨疾患との鑑別で問題となり得るが、病的か生理的かを区別する適当な基準はみつからなかった。

114 ^{99m}Tc-MDPの腫瘍外集積について

松本誠一[1]，川口智義[1]，網野勝久[1]，真鍋淳[2]，金田浩一[2]（癌研病院整形外科[1]，癌研病院放射線科[2]）

^{99m}Tc-MDPによる骨シンチは骨腫瘍のみならず軟部腫瘍においても高い頻度で集積が見られることは前回の本学会にて発表した。今回は腫瘍のみならず腫瘍の周囲にひろくTc-MDPの集積を認めた症例を経験したので報告する。

症例：軟部肉腫69例に術前骨シンチを施行したがうち3例で腫瘍周囲に広くTc-MDPの集積を認めた。また同時に施行されたMRIでも同様の範囲が腫瘍同じ様に描出された。切除材料の肉眼所見では腫瘍は異常集積の認められた範囲より狭い範囲に存在し，むしろCTや超音波検査で予測された範囲と一致していた。これより腫瘍周囲にみられた異常集積は周囲の浮腫や出血が原因であったと考えられた。このことは実際の腫瘍切除にさいしてはこれら集積部位をすべて切除せずとも再発が認められなかったことからも証明された。一方逆に骨シンチにて描出される範囲以上に腫瘍浸潤がひろがっている症例もあり切除範囲決定に際してはCTや超音波検査などの所見をも参考とすべきといえる。

115 慢性腎不全患者の骨シンチグラムの定量化

原滋(1)、吉田文直(2)、飯田昭彦(3)、松尾導昌(3)、（成田記念病院放射線科(1)、同内科(2)、名古屋市大放射線科(3)）

骨シンチグラムは全身骨の一斉評価が可能であるが、その結果の評価を多く視覚に頼っているのが現状である。このため長期血液透析患者の重大な合併症である腎性骨異栄養症の経過を何年間にもわたり経時的に比較検討することが困難であった。そこで我々は慢性腎不全患者の骨シンチグラムの客観的な定量化を試みたので報告する。　対象は慢性腎不全にて維持透析を行なっている男性40例、女性31例の合計71例である。被検者の血清カルシウム、リンおよびアルカリフォスファターゼの各値は骨シンチグラム測定の前後2週間以内、c-PTHは前後4週間以内のデータを採用した。コントロール群は30例で代謝性骨疾患は除外した。　Tc-99m HMDPを0.3mCi/kgにて静注、3時間後に低エネルギー高分解能コリメータを装着してホールボディスキャンを施行した。身体各部位の相対値を求め、各血清データとの有意性を検討した。　コントロール群とc-PTH高値群では頭部、膝関節部への集積率に有意差を認めた。血清c-PTHと頭中央／胸下部、頭頂／胸下部、頭頂／胸maxに有意の相関を認めた。血清アルカリフォスファターゼと頭中央／胸下部、頭中央／胸max、頭頂／胸下部、頭頂／胸maxに有意の相関を認めた。血清カルシウムおよび血清リンとシンチグラムから求めた定量値に関しては相関を認めなかった。

Presented by Medical*Online